日本語初級学習におけるカラとノデ

母語話者と非母語話者　学習時期の遅速　初級学習とポライトネス理論

三　原　裕　子

1．はじめに

ここで取り上げるのは原因・理由を表す接続助詞のカラとノデついてである。（以降、接続助詞の「から」や「ので」をカタカナ表記カラ・ノデと示す）母語話者にとっては「何となく」「深く考えたこともない」カラとノデの使い分けだが、非母語話者にとってその誤用は人間関係に係わり、誤解を招くことすらある。

そこで本稿ではカラとノデの使用について小規模なアンケートを行い、これを元に初級学習者のカラとノデの使用の判断には、日本事情からのアプローチと「ポライトネス」理論を基盤に据えた指導が適していることを述べたい。本稿で言及したポライトネス理論については最終節で述べる。

2．学習者のカラとノデ　アンケート結果から

まず下のカラとのノデについてのアンケートを見ていく。（Ⅰ）が母語話者12名、（Ⅱ）が非母語話者20名である。調査は2019年５-６月にかけて日本語を母語とする大学生12名と日本に留学して日本語を学んでいる短期留学生・学部留学生20名を対象に実施した。学習歴（0.5～６年）、性別、出身国等の属性は結果に大きな影響が見られなかったため、必要に応じて言及するにとどめた。設問は「から」か「ので」の穴埋め形式の例文を問題集から選び、問題集の正答を一応の正答とした。聞き手の条件は設定しなかった。

＊ID の N は native speaker、nN は non-native speaker を、最上段は質問番号を指す。また表中の「１」は正答、「０」は誤答である。設問９までがカラ、質問10以降がノデである。これは回答者には伏せて知らせていないが、この配列に因る正答の偏りはみられなかった。小計とは正答実数とその割合（％）である。

Ⅰ〔母語話者〕

ID ＼質問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	カラ 小計	10	11	12	13	14	15	ノデ 小計
N 1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	7 (78)	1	1	0	1	1	1	5 (83)
N 2	1	1	1	0	1	1	1	1	1	8 (89)	1	1	1	1	1	1	6 (100)
N 3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9 (100)	1	1	1	1	1	1	6 (100)
N 4	0	1	1	0	1	1	0	1	0	5 (56)	0	1	1	1	1	1	5 (83)
N 5	1	0	1	0	1	1	1	0	1	6 (67)	0	1	0	0	1	1	3 (50)
N 6	0	1	1	0	1	1	0	1	1	6 (67)	1	1	1	1	1	1	6 (100)
N 7	0	1	0	0	1	1	0	1	1	5 (56)	1	1	1	0	1	1	5 (83)
N 8	1	0	0	1	1	1	0	1	1	6 (67)	1	1	1	0	1	1	5 (83)
N 9	0	1	1	1	1	1	0	1	1	7 (78)	1	1	0	1	1	1	5 (83)
N10	0	0	1	0	1	1	0	1	1	5 (56)	1	1	1	1	1	1	6 (100)
N11	0	1	1	1	1	1	1	1	0	7 (78)	1	1	1	1	1	1	6 (100)
N12	1	1	0	1	1	1	1	1	1	8 (89)	1	1	0	1	1	1	5 (83)
平均正答数と正答率										6.6(73)	平均正答数と正答率						5.3(59)

Ⅱ〔非母語話者〕

ID ＼質問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	カラ 小計	10	11	12	13	14	15	ノデ 小計
nN 1	0	1	1	0	1	1	1	1	0	6 (67)	0	1	1	1	1	0	4 (67)
nN 2	0	1	1	0	1	1	0	1	0	5 (56)	1	1	1	1	1	1	6 (100)
nN 3	1	1	1	1	0	1	0	1	0	6 (67)	0	0	1	0	0	1	2 (33)
nN 4	0	1	0	0	0	1	1	0	1	4 (44)	0	0	0	1	0	1	2 (33)
nN 5	0	0	1	0	0	1	1	0	1	4 (44)	0	0	0	0	0	1	1 (17)
nN 6	1	1	1	1	0	0	0	0	1	5 (56)	0	1	1	1	0	0	3 (50)
nN 7	0	1	1	1	0	0	0	1	1	5 (56)	1	1	1	0	0	1	4 (67)
nN 8	0	1	1	1	0	1	1	1	1	7 (78)	0	1	1	1	1	0	4 (67)
nN 9	0	1	1	0	1	1	0	1	0	5 (56)	1	1	0	0	0	0	2 (33)
nN10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9 (100)	0	0	1	1	0	1	3 (50)
nN11	0	1	1	0	0	1	1	0	1	5 (56)	0	0	1	1	0	1	3 (50)
nN12	1	1	1	1	0	0	1	0	1	6 (67)	1	1	1	1	1	1	6 (100)
nN13	1	1	1	1	0	1	1	0	1	7 (78)	0	1	1	0	1	0	3 (50)
nN14	1	1	0	1	0	1	1	0	1	6 (67)	1	1	0	1	0	1	4 (67)
nN15	0	1	1	0	1	1	1	1	1	7 (78)	0	0	0	1	0	1	2 (33)
nN16	0	1	1	0	1	1	0	1	0	5 (56)	0	1	0	1	1	1	4 (67)
nN17	1	1	1	1	0	1	1	1	1	8 (89)	0	1	0	1	1	0	3 (50)
nN18	1	1	1	0	0	0	0	0	0	3 (33)	0	0	0	0	1	1	2 (33)
nN19	1	1	1	1	0	1	0	0	1	6 (67)	0	0	1	1	1	1	4 (67)
nN20	0	1	1	0	0	1	1	0	1	5 (56)	0	1	1	1	1	1	5 (83)
平均正答数と正答率										5.7(63)	平均正答数と正答率						3.4(56)

正答の平均は15問中母語話者が12問、非母語話者が９問であった。nN１～３は上級レベル、nN４～16は非漢字圏の中級、nN17～20は漢字圏の学部生である。カラの正答率は母語話者が73％、非母語話者が63％であるのに対し、ノデの正答率は各々58％、56％である。母語・非母語話者共にカラの正答率（N73％ .nN63％）はノデより高く、ノデの正答率（N59％ . nN56％）は母語話者と非母語話者間の差は小さく、かつ正答率は低い。

結果からは、カラは学習歴や出身との関係が大きく影響したと思われるが、ノデはそれらの属性による習熟度に大差はなかったようである。これはのちにも述べるがカラは母語話者・非母語話者とも程度の差はあれ常用語として馴染が高いが、ノデは文章語であり、表現効果の高い語だと意識された（または学習した）ことに因る差と思われる。系統だった学習をしていない母語話者も無意識のうちにノデの方が丁寧な語（相手に配慮できる語）ととらえ、それよりも親近感がある常用のカラのほうが高得点に結びつく傾向があったと解せる。

学習項目としてあげられる遅速もこの調査結果の違いを考えるポイントになる。

日本語教育の現場では、一般的にカラは早い段階でテキストに現れ学習されるのに対し、ノデは後半になって教えられる。例えば『みんなの日本語』ではカラは９課で、語末の「用事がありましたから。」「ええ、残念ですが、友達と約束がありますから、…。」も併せて提示される一方、ノデは39課になって初めて学習する。同様に『大地』も９課でカラが、25課でノデが現れる。『語学留学生のための日本語Ⅰ』でも８課でカラを学び、第二分冊『語学留学生のための日本語Ⅱ』の26課になって初めてノデを学ぶ。

多くの場合、学習者はテキストの始めはやさしく、次第に難解になると認識している。積み上げ式であれば、至極当然のことである。既習項目は繰り返し使われるためカラの使用場面は増え、馴染も増す。するとカラは使いやすく便利だが、ノデは使えたら使うと言うスタンスに留まってしまう。非母語話者のコメントに「自分なりに「から」の方を多く使います」と言う回答もこの裏付けとなる。ノデとすべきところをカラとする学習者には、このように学習項目の提示における遅速の問題も影響していると考えられる。以下に例を挙げ、非母語話者の使用の実態を見ていく。

設問２と８は「あぶないです（　）絶対にこのスイッチにさわらないでください」「台風が来る（　）早くにげろ」のような危険回避の情報である。母語話者の正答率は問２が75％、問８が92％であるのに対し、非母語話者は問２が95％、問８が50％と逆の傾向を示した。

「逃げろ」のような命令形の前件にノデを使った非母語話者が多くいたことになる。非母語話者にとっては「です」の後接にはカラが来ると考えた結果とみなせる。また「逃げろ」のような強い命令に対して、口調を和らげるためにノデを接続させた方が適切と考えた可能性もある。

問８ほど強い口調ではないが、問３のように「あっ、ハサミはそこに置いておいて。後で使う（　）」というような、正答率が逆転した例もある。正答率は母語話者が75％、非母語話者が90％である。非母語話者にとっては指示出しの命令形であり、聞き手に「して欲しい」ことの理由を説明していると解して「使うカラ」としたのであろう。一方、母語話者はどち

らかと言うと依頼であるから、強い口調は控え柔らかな言い方として「使うノデ」が適切と考えたことに因るととらえた。調査終了後、一人の非母語話者に問３の判断理由を聞いたところ「「置いておいて」は友だちに言うことばだからカラを使う」という親密さによる判断、距離を縮めて「お願いする」（依頼する）時はカラを使うと言う使用意識が示された。確かに「置いておいて」は「オイトイテ」のような、より口語的要素の強い縮約形が存在することも背景にある。これは普通形＋カラの接続が先に教えられ、習得後、普通形＋ノデを習うと言うシステムにも因ろうが、文法の側面からの選択と言うより、コミュニケーション上の親密さ、すなわち文化的背景が正答を引き出した例である。母語話者の中には折角「片付けてあげよう」と親切に申し出てくれた人に「使うカラ」は強過ぎる、失礼だと回答した者もいた。

今回調査した中には、カラもノデも正答となり得る設問があったため、これは集計からは外した。例えば「約束があります（　）、今日は会えません」の場合、母語話者・非母語話者共にカラとノデの選択は半々であった。初級段階では「ありますから」と教授されることが普通である。母語話者は誘われたことの断りを「実際はお会いしたいが、どうしても先約がある」という事情を、親密さを込めて釈明するため本来は理由説明のカラが望ましいところでも、丁寧に言うためにノデを選んだと推測できる。一方のみを正答と即断するのはむずかしい。

問11と問14は理由を説明する文における使用である。問11「先生、おなかがいたい（　）帰ってもいいですか」、問14「昨日はどうして休んだのですか？―頭が痛かった（　）休みました」は母語話者が全員正答であったのに対し、非母語話者は60％、50％と正答は低率である。母語話者である教師にとっては容易に導き出せる選択ではあっても、非母語話者の判断基準が曖昧であることは容易に察せられる。

調査用紙の〈自由回答欄〉には以下のようなコメントがあった。（原文のまま）

- 「接続がありますから、から、ので、どちらを使うか大体わかってきました。」（nN17）
- 「気持ちで決めました。でも自分なりに「から」の方を多く使います」（nN３）
- 「韓国で「ので」と「から」の意味は同じですが、日本で「ので」は尊敬語として、そして「から」は普通体として使われているので、公式の場では「から」が使えないと言われました。」（nN２）
- 「「ので」に接続する文は命令形はダメ、「から」より柔らかな言い方」（nN１）
- 「先生から「他人に事情を説明する（自分が何故こうしたのか）時できるだけ“ので”を使う習慣を身につけたほうが良いよ」と言われました。」（nN１）

また母語話者２名は欄外に「感覚で」と書いていたが、回答用紙回収後、複数名からは「お腹が痛いから帰ります」「明日用事があるから休みます」とは先生にはぜったい言えない」とコメントされた。理由は「なぜかよくは分からないが、失礼な気がする」と答えている。つまり自分との親疎や上下の待遇関係が判断基準になっているのである

一般的には日本語指導の初歩段階で「カラを使うと主観的で言い訳がましくなる」と習う

が、母語話者は教場の学習ではなく、生育・生活環境から体得しているようすが察せられる。この母語話者の体得と非母語話者の習得との差をどのように埋めるかが一つの課題になる。初級段階では接続や主観・客観による判断は難しい。また自己弁護か状況説明かも生育環境、つまり文化背景が違えば判断も異なる。このような使用状況の差はカラとノデのどのような性格に起因するのか。カラとノデが多用されるようになった時期に遡って見ていく。

2．史的観点からのカラとノデ

まず、カラとノデの持っている性格を明確にするため、使用が盛んになった時期の事情を述べる。カラとノデは同時に発生したものではない。一般的にことばの変化要因から考えれば、同じような機能を有するものが同時に発生し、隆盛を極めることは大よそない。

カラとノデも同様に接続助詞カラが、それ以前の上方由来の「ほどに」「ゆへ」他に代わって増加し、江戸中期以降にはカラが主用されるに至る。カラは次第にその用途の広範さを負担しきれなくなり、一部をノデが分担するようになる。ノデは明治20年代に漸増し、昭和の半ばには現在とほぼ同様な使用状況になったと言われる。江戸期におけるカラとノデの推移については三原2019で述べたため、ここではアウトラインの報告にとどめるが、調査対象としたのは、洒落本他に比べて保守的と言われる江戸時代後期の笑話集 ― 咄本である。現在日本語教育で扱われる言葉の基盤は東京語に拠るところが多く、その東京語の基礎となるのは江戸時代後期の言葉である。そのうち、遊里で使われるような先鋭的な流行語よりも、日常語として既に定着している語を多く採集できる咄本が好適な資料と考えている。

江戸語が、江戸語として自立していくのは江戸時代半ばになってからである。例えば江戸時代初期の『鹿の巻筆』（貞享3.1686）ではホドニがその使用総数の約50％を占めるが、この時期から85年後には、使用は１～２％にまでに激減する。表１ではユへの衰退がカラの使用の集中を招き、カラはその地位を確立するようすがわかる。また他の表現形式をおさえ、カラがその使用を67％と増やして絶対的優勢になる天保（1821-1845）以降には、初期に僅かであったノデが増えていく状況が見て取れよう。

なお、時期は便宜的に江戸時代後期を寛政の改革・天保の改革で区切り、Ⅰ期を安永～寛政（1772-1800）、Ⅱ期を享和～文政（1801-1829）Ⅲ期を天保～明治前半（1830-1890頃）とした。Ⅲ期を明治前半まで延伸したのは作者の言語形成期が幕末であったことによる。調査からは後期咄本60作品（各期20作品）からユへ・カラ他総数1101例を得た。

表１　江戸板　時期別に見た接続助詞の出現

上段は出現例数、（）内数字はその期の使用割合

	ゆへ	から	ので	ほどに	によつて	さかい
Ⅰ期 1772-1800	1.64(45.4)	174(48.2)	1 (0.3)	7 (1.9)	11(3.0)	4 (1.1)
Ⅱ期 1801-1829	148(36.0)	253(61.6)	2 (0.5)	4 (1.0)	4 (1.0)	0
Ⅲ期 1830-1890	87(26.4)	221(67.2)	16(4.9)	0	3 (0.9)	2 (0.6)

江戸の人々の生活を活写したと言われる『浮世風呂』（文化６～10　1809-1813）では上方ではサカイが、江戸ではカラが使われていたことが上方と江戸の女性の会話によって描かれる。これからは江戸時代半ばには既にカラが江戸の常用語になっていた状況が窺える。

ではノデの使用はどうか。ノデについては永野賢1952に詳細な論があるが、後節に譲り、

ここでは史的観点に限って見ていく。後期咄本におけるノデの使用はⅠ期、Ⅱ期は極めて少ないが、Ⅲ期に入って微増がみとめられ、幕末期以降のノデの発展の兆しが読み取れる。

原口裕1971ではノデが優勢になるのは明治24年（1892）の斉藤緑雨作『油地獄』よりのちとしているが、これは「口頭語のカラが持つ「卑俗なニュアンス」を避けた」（p.40）ためであり、作品が持つ写実的性格を踏まえた結果と指摘している。現代語ではその差は顕著で、毎日新聞（昭和45　1970）の政治面、社会面ではノデが地の文、会話的文章ともにカラより優位という逆転現象が報告される。つまりノデの使用は、カラのもつ口語性と卑俗なニュアンスに代わるものとして増加したのである。江戸時代の戯作は狭小な社会の心情的な会話がメインであったため、カラの単一使用で済んだ。しかし広範な社会を写実的に陳述し、正確に伝達する（新聞のようなものの）ためには新たに生まれたノデの使用が必然であったと考えられる。つまりノデは既に話し手の主観を越え、現実を客観的に写す役割を担っていたことが分かる。このようなノデの特性が都市化した言葉（客観的で情実を加えない正確な表現）を求める近代人に歓迎されていったと言える。原口1971をうけた吉井量人1977も19世紀末には東京語におけるノデの地位が確立し、江戸語・東京語のもつ分析的傾向がノデの使用の伸長を助長させたと述べている。これはアンケートにも記載される「ノデは尊敬語として使われ、公式の場ではカラは使えない」「他人に事情を説明する時はノデを使う方が良い」という役割分担に通じるものであり、江戸期には既に平常語か尊敬語か、言い訳（主観）か事情説明（客観）かという性格の違いを基にした使い分けの兆候が生まれていたことになる。

以上からはカラの一部をノデが分担し漸増した状況とその要因を述べてきた。すなわち新興の形として生まれたノデは、既に広範かつ一般的に使用され馴染み深いものになっていたカラよりも、表現的価値の高い書き言葉として、その地位を獲得したと言える。後発のものはそれだけ目新しく、多用されていない分、新鮮で「手垢が付いていない」ためである。言わばカラは普通の原因や理由を直截的な話し言葉の場面で用いられ、ノデは丁寧な場面、婉曲的な場面での使用が与えられたと言えよう。主観的で、自身の主張を伝達するのはカラであり、一歩引き下がった依頼にはノデが用いられる傾向もこの使い分けが根拠となる。

では、そのようにして端を発したカラとノデは現行どのような状況にあるのか。

永野賢1952に端緒が開かれたカラとノデの考察は、さらに多くの分析と解明が加えられ成果が生まれている。しかしここで詳細を述べることは紙幅の関係上むずかしい。次節では永野1952の解説と辞書について言及するに留め、そのように論じられ、進化を遂げているカラとノデについて「初級学習者のやさしい使い分け」というテーマに立って検討していく。

3．先行論文と辞書の記載

先行論文として筆頭に挙げられるものに永野賢1952がある。これによってカラとノデの相違点はほぼ尽くされていると言われるが、その中では松下大三郎1930、三尾砂1942他の論考が引かれ、両者の相違は「未来や命令形の意味を含む文が次にくるときには、「から」は使うが「ので」は使わない」（p.472）点であると指摘され、推量や命令、依頼の文にノデが使えないのは、ノデに主観的な理由を表す機能がないためと論じる。このような性格の相違が「「から」だと強すぎて角が立つところを、「ので」を使うと、丁寧な、やわらかい表現になり、下接の丁寧形と照応する」（p.485）と言われ、以降の使用についての指針となっていく。

ニュートラルな立場と思われる辞書でもカラとノデは〈主観と客観〉、〈押しつけがましさや根拠の強調と丁寧な表現〉と言う区別がトレースされる。

『日本国語大辞典　二版』（2000～2002）、『日本語文法大辞典』（2001）を始め、『基礎日本語２』（1977）、『基礎日本語２　角川小辞典８』（1980）『日本語教育事典』（1982）他でも〈主観か客観か〉、〈高圧的か丁寧か〉、〈確実性が乏しいか明らかか〉という使用ポイントが指摘され、使用の相違が挙げられている。ただし、この使用の違いは多くは使用意識、言い換えれば文化的背景に依存することが多い。文化的背景の異なる学習者には「押しつけがましいかどうか」は納得できない場合もある。ではこのような難点を日本語教育、特に初級段階における現場ではどう工夫していけばよいのかを考えていく必要がある。

4．ポライトネス理論とカラ・ノデ

カラとノデの使い分けには、文化的背景が大きく依存することが分かった。ただし、初級の日本語学習者に日本語の歴史的背景を個別に説明するのは困難である。初学の段階では語史的な簡単な推移と要因を解説し、一定のルールに沿った使い分けを学習していく方法が適当と考えている。

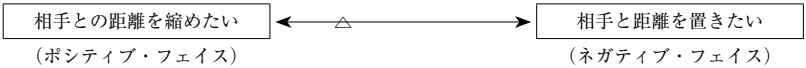
そこで、初級学習者を対象とした指導法として「文化的背景の基盤に基づくポライトネスストラテジー」による一部を判断の方法に取り上げたい。ここで言うポライトネスとはBrown and Levinson の提唱するポライトネスのことである。ポライトネスとは簡潔に言えば「人間関係を円滑にするためのストラテジー」つまり「対人配慮行動」（宇佐美1993b. 2001a. 2002他）のことである。これは留学生には、人には〈相手との距離を縮めたい―好意を持たれたい〉か、〈相手と距離を置きたい―邪魔されたくない、立ち入られたくない〉かという考え方があるということで説明している。簡単に言えば「相手にどう受け取られるかを配慮した話し方」であり、教師側の認識としては「ポシティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」を念頭に置いた説明である。

そのためにまずカラとノデの歴史的背景である。前述のように江戸期には、カラが主用されたのちに、ノデが使われ始め現在の多用に至る。人々に新鮮と受け取られたノデは文章語的であり、相手に敬意を表す場合に使用されるようになる。また一方でカラは馴染があるた

め卑俗な常用語としてカジュアルな会話スタイルと認識される。相手と距離感を持ちたい、尊敬していることを表したい場合はノデを使い、距離を縮めて親密度を増したい時はカラを使う、言うなれば「言語ストラテジー」が互いの会話目的に沿うのである。

特に日本人は相手から心理的距離感を縮められることを嫌う。概してネガティブポライトネスが優勢である。「明日、用事があるカラ休みます」では日常語のカラを使うことで休む理由を相手が知っているかのようであり、お互いが親密な（馴れ馴れしい）関係にある印象をうける。一方で「明日、用事があるノデ休みます」では文章語的な言い回しのために相手との心理的距離感は大きくなり、相手には「尊敬されている」「改まった言い方である」と好ましく映る。「用事があるノデ休んでも良いでしょうか」と相手に諾否のイニシアティブを持たせた場合、その印象はさらにはっきりしよう。聞き手側にしても、否応なく自己の決定権を侵害されて「休む」と言われることには不快感を持つ。話し手に心理的な距離感を縮められ、フェイスが脅かされているからである。

このように初級段階では〈相手との距離を縮めたい―好意を持たれたい〉のか、〈相手と距離を置きたい―邪魔されたくない〉のかという考え方は有効である。初級学習者の使用の際に次のようなスケールを示す。相手との心理的距離を縮めたい時と、距離を置きたい時とでスケールの「目盛」の位置を少しずつずらす。例えば、「自分は授業に積極的でまじめな学生である。先生を尊敬している」と承認欲求・ネガティブポライトネスを表現したいときは右方向に目盛をずらして文章語的なノデを用い、「この会話クラスと先生が大好きである。先生を話の分かる人、フランクな人だと思っている」と親愛の情を示したい時は目盛を左方向にずらすという単純な使い分けである。同様に相手不快感を与えたり、傷つけたりしてしまいそうな場合（フェイスの侵害行為）を避けるためにも、使用することができる。



勿論一般的な会話では異例は適例よりも多い。しかしこのようなスケールを知っていることは必要であろう。学習者はある程度応用する（スケールを用いて使用のスタンスを探る）能力は持ち合わせているからである。緊張した改まった場面でもその場を和ませるためにカラを使う（＝周囲に配慮できる人物であるという承認欲求が充たせる）ことや、ノデの多用が却って無礼ととらえられる（＝自身の領域に立ち入ってほしくないとする）可能性のあることも理解は可能である。この場合、Brown and Levinson が言う骨組としての普遍性は当てはまる。初級段階ではこのスケールと非常にシンプルな史的事実の説明（日本事情）は初級教育に有効に働くと考えられる。今後異例が多数現れることによって、このスケールも補正され発展が見込めると考えている。

≪参考≫

【テキスト】
『みんなの日本語　初級』（2014）スリーエーネットワーク
『大地』（2013）スリーエーネットワーク
『語学留学生のための日本語』（2002）凡人社
『Situational Functional Japanese 2』（2012）凡人社
『Japanese for Busy People Ⅱ』（2007）国際日本語普及協会
『できる日本語　初中級』（2018）アルク

【ハンドブック】
庵功雄他『初級を教える人のための日本語ハンドブック』（2000）スリーエーネットワーク
国際交流基金　日本語国際センター編『教師用日本語教育ハンドブック３　文法Ⅰ』凡人社
田中寛『はじめての人のための日本語の教え方ハンドブック』（2006）国際語学社
日本語教育学会編『日本語教育ブック』（1990）大修館
三吉礼子『ことばをつなぐ助詞　初・中級』（1997）専門教育出版

【辞典　事典】
『基礎日本語２　角川小辞典８』（1980）森田良行　角川書店
『基礎日本語文法』（1989）益岡隆志・田窪行則　くろしお出版
『日本語教育事典』（1982）日本語教育学会編　大修館
『日本国語大辞典　二版』（2000-2002）小学館国語辞典編集部
『日本語文法大辞典』（2001）山口明穂、秋本守英 編　明治書院

【参考文献】
宇佐美まゆみ（2002）「ポライトネス理論と対人コミュニケーション研究」『日本語・日本語教育を研究する』（18）
宇佐美まゆみ（2003）「異文化接触とポライトネス」『国語学』54-３
宇佐美まゆみ（2008）「ポライトネス理論研究のフロンティア」『社会言語学』11-１
大塚生子（2013）「ポライトネス理論におけるフェイスに関する一考察」『近畿大学　教養・外国語センター紀要』４-１
永野賢（1952）「『から』と『ので』はどう違うか」『国語と国文学29巻２号』東京大学国語国文学会　＊本稿の頁は服部四郎ほか編『日本の言語学　第４巻　文法Ⅱ』（1979）大修館に拠った。
原口裕（1971）「「ノデ」の定着」『静岡女子大学研究紀要４』
真鍋雅子（2013）「ポライトネスの視点から見た中上級日本語学習者の発話」『言語科学研究　神田外語大学大学院紀要19』
松村明（1944）「助詞の異同について」『日本語』（『江戸語東京語の研究』1957所収）
三尾砂（1995　初版1942）『話言葉の文法』くろしお出版（初版1942帝国教育会出版部）
三原裕子（2019）『江戸語資料としての後期咄本の研究』ひつじ書房

【参考　アンケート用紙】

下記が配布したアンケート用紙である。クイズでないことを強調し、無記名にした。
アンケート用紙に予めナンバーを振って、後日追跡できるようにしたものもある。
項目は「みんなの日本語」ほかから抜粋した。

「から」「ので」どちらが入りますか？

1	やくそくがあります（　　）、今日は会えません。
2	あぶないです（　　）、このスイッチには絶対 ふれないでください。
3	あっ、はさみはそこに置いておいて。後でつかう（　　）。
4	時間がありません（　　）、本は読みません。
5	あしたテストがある（　　）、今日は遊べないよ
6	いい機会 chance だ（　　）、話をきいてくれませんか。
7	あなたのために いっしょうけんめい　つくりました（　　）　食べてくださいね。
8	台風が来る（　　）、早く逃げろ
9	おそくなりました。ちょっと用事があったものです（　　）。
10	ゆっくりできましたか？ええ、とてもよく眠れました。ここは涼しい（　　）。
11	先生、おなかがいたい（　　）、帰ってもいいですか
12	時間がない（　　）、本は読みません。
13	一緒に旅行しませんか？　お金がない（　　）、旅行には行きません。
14	昨日はどうして休んだのですか？頭がいたかった（　　）、やすみました。
15	店長、両親が日本にくる（　　）、3 日間、休みたいです。

a 大学はどちらですか？
b 日本語は なん年 べんきょうしましたか？